

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 木野井悠斗

年齢 10 歳

職業・学校名

福田小学校

しんさいを過して

櫻井悠斗

ぼくは、しんさいがあつた時、保育園でお昼
 を食べていました。犬がゆれがとつ然きて
 先生に起こされ、みんなで園庭に逃げました。
 ゆれがおさまった後、おじいちゃんかむかえ
 きて、家に帰りました。家についたとたん安
 心したのとこわかったのとで、ぼくは泣いて
 しまいました。その後、今までにない大きつ
 波がぼく達の町をおそい、海辺のものは、す
 べて流されてしまいました。電気はついたけ
 ど、水道がとまってしまい、とても不便でし
 た。お店にいっても食べるものがなくて不
 便で、物の大切さがとてもよく分かりました。
 新地町は海の近くを電車が通っていたので
 波で線路が流されてしまいました。新しく作
 っている線路は高くつ波がきても流されない
 ような工夫がしてあります。1000年に一
 度といわれているこのしんさいがもし今度来
 ても、人々が困らないようなひなんけいと

ひびょう食やひびょう物資の確保(20文字×20行)
 保が必要だ"と
 思います。

氏名 日里 咲子

年齢 9 歳

職業・学校名 福田

東日本大震災で、わたしたちは、いろいろな
 物をうしなりました。
 家をなくした人、家族をなくした人もいます。
 わたしのおはあちゃんは、家をなくしました。
 去年の11月におはあちゃん家は、あたりくく
 家をたてました。
 これからも、いろいろな人が家をたてると
 思います。
 これからも、復元をつづけていきたいです。

氏名 佐藤 智子

年齢 10 歳

職業・学校名

小学生

大震災から丸五年となる年になりました。

はたして復興に向けてうごいていっているのでしょ
うか。道路では、ダンプが砂、土を運ぶ耳を
すますと、大きな音が聞えます。鉄を打つ音
線路を造っている音です。この新地町から砂
土を運ぶダンプがきえ、鉄を打つ音がきえて
線路には電車がはしる音がし、海辺には防災
緑地のどんぐりの木がのびのびと育ていく。

本当に元にもどらなると復興とはいえないと
思います。まだまだ先だと思ふけど復興に向
けてがんばってくれている人々がいることは
私はおすれません。全世界の人々に助けをま
らしいあのこわい原発にも進んで仕事をしてい
る人々がいることも私はずいぶんおすれま
せん。早く元の福島にもどってほしいと私は
思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木俊太

年齢 10歳

職業・学校名 榴田小学校

震	災	か	ら	も	う	す	が	5	年	目	に	な	っ	て	あ	ち	ら	こ	ち
ら	か	ら	大	き	な	か	ん	ぱ	外	何	だ	も	通	っ	て	い	て	建	て
物	や	町	か	少	し	ず	つ	ふ	え	て	き	て	、	近	く	に	あ	っ	た
か	せ	つ	じ	ゅ	う	た	く	も	と	り	こ	の	し	が	始	ま	っ	て	い
て	新	し	い	家	だ	に	引	、	こ	し	て	い	っ	た	。				
み	ん	な	次	の	新	し	い	生	活	が	始	ま	り	、	ゆ	た	か	に	な
っ	て	い	っ	て	ほ	し	い	。											

氏名 佐伯 崇哉 年齢 11 歳 職業・学校名 福田小学校

東日本大震災から、約5年がたちました。震災のときは、いろいろ悲しいことがありました。家が津波で流されたり、ひいおばあちゃんが家のしたじまになっ、と死んでしまいました。でも、今は、らちはま地区に住んでいて家が流されてしま、た人は、新しい家を作りました。僕たちの家族も去年の3月に家を作りました。そして、津波で流されたせんろも、新しいせんろがつかわれてきて、復興したんだな〜と感じます。でも、震災のときのことは、かんたんに人に話すことはなれと思ひます。例えば、だれかが、「うちは力が下しんすいたんだ」と話しているときに、となりに、親族が死んでしまつた人は、「それだけで…」と思うかもしかません。僕はそう思ひます。だけでその悲しさをわすれとはひけないと思ひます。その悲しさをあすれずには新地町はふ、こうしてきて思ひます。新地だけでなく、福島県、東北地方、日本全体がふ、こうを続け、進んでいきます。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 齋藤 悠那 年齢 11歳 職業・学校名 芥富田小学校

私	は	東	日	本	大	震	災	に	お	き	に	あ	ら	な	い	て
あ	ら	り	お	も												
私	の	お	お	お	ち	が	く	の	家	が	震	災	に	お	か	ら
し	た	。	そ	し	て	が	し	お	の	通	り	行	か	せ	し	た
お	は	あ	ら	が	人	の	お	家	が	な	が	木	こ	こ	な	人
あ	り	ま	し	た	。	そ	し	て	私	は	東	日	本	大	震	災
ま	は	保	護	所	に	し	た	。	し	が	も	家	持	た	は	ら
う	た	の	て	お	も	い	で	し	た	。	お	お	大	震	災	の
し	た	。	な	あ	ら	に	お	も	い	た	ら	な	い	て	お	も
の	て	お	も	い	は	な	い	て	お	も	い	は	ら	な	い	て
。																

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 江上 遙

年齢 11歳

職業・学校名 新井町立福田小学校

震災から五年が経ちました。今は、少しずつ復興して行きます。私が思い出したことは、海で遊んだ時の思い出と地しん、つなみのことです。つなみで思い出の場所やきれいな砂浜、町などがほとんど流されてしまいました。つなみの後は、かたき山でいっぱいでした。じしんでは、とても長いじしんが続き、いつものじしんとは思えないくらいいてこわかったです。海の様子を見るのがこわかったし、海へ行くのもいやになりました。

今は復興はしてきて、この前学校行事で、皆で海にどんぐりを植えに行きました。はやく大きくなり木になっ、てほしいなと思いました。そして、何もなくなっ、てしまっ、た所に建て物や道路、きれいな公園などできあがるのが楽しみです。

未来では、綺麗な土地にそと、てほしいなと思いました。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 藤原 菜

年齢 11歳

職業・学校名

福田小字木交

わたしは、東日本大震災から5年立。て、い
までも、東日本大震災のことを覚えています。
こわが。たことが悲しいことがありました。
わたしは、福島県をもとどりにしたのですが
もとよりにはできなけれど、悲しい気持ち
を、楽しい気持ちになれる町づくりをしたい
と思、ています。

たとえば、人がおとされる仮とうのあるお店
やお花ばたけや広い公園があ、たすいなあ
と思、います。

たが、わたしは、新地町が大好きです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木 瑞空 年齢 10 歳 職業・学校名 福田小学校

東日本大震災から今年の三月でもう5年が
立ちました。まだ家を立てられず、復興住宅
に何年も過んでいる人たちがたくさん行ます。
ですが、福田の復興住宅は、解体作業が進め
られています。そして学校では、次の地震に
備えて、避難訓練をしています。ですが、ま
だ見つかっていない人たちもたくさんいます。
どうか、その人たちを見つけることは、でき
ないのでしょうか。そして次にまた多きい地
震がこないようにいつもいつもぼくは、願っ
ています。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤永遠 年齢 10歳 職業・学校名 福田小学校

私の「東日本大震災からの復興への想い」は、
 東日本大震災で大きないしんがおきて大津波
 がきました。それに情報がとどいたのは、約
 4分後とし、たときは、おそくかんいるとき
 がありました。それでも、みなん所には、お
 ちっいこりけてよか、たです。現在は、津波
 で家をなくした人は、仮せつをて家をたて
 たおす人が多くなっ、てります。それに、どん
 どん、食料品や野菜、くだものなどの生産料
 が増えて福田小学校の五年生は、そばのたね
 まきをして、そばをいれる畑をつくることか
 できました。東日本大震災がおきて復興した
 ことで食べ物などの生産量が増え津波が来て
 から約5年がたち、家もどんどん増え、まことか
 できました。私の祖父母も家が海のちかくで
 なかされてしまいましたか、家をたてること
 ができました。なので、東日本大震災がおき
 てからの復興は、とてもいいことだと私は、
 思いました。しかし、なせ昔みたりに提防を
 たてたのかと思ひました。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 杉江 莉緒

年齢 11 歳

職業・学校名 福田小学校

私は、東日本大震災がおきてとてもショック
 でした。なぜなら、知っている人や知ってい
 る建物がなくなつて、私が知っている人、建
 物がほとんどなくなつてしまつたからです。
 そして、何よりショックだつたのは、海です。
 見て、ビックリしました。がれきがたくさん
 あつて、地面が見えなかつたことです。水の
 上には、家がういてあつたり、車がういてい
 たりしていたことがとてもショックです。あ
 んなにきれいだつた海がなみがきて地しん
 がおきてから海ががれきでいっぱいになつて
 でも、じえたいの人たちがこの福島県のがれ
 きをかたずけてくれていまの福島県は、だん
 だんもとにもどつてきています。私は、じえ
 たいの人たちにとつても感謝をしています。が
 れきのかたずけやゆくえふめいの人をさがし
 たりしてくれたことを今でもそのことをおぼ
 えています。もう二度とあんないやなおもい
 をしたくありません。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 田んぼ

年齢

11 歳

職業・学校名

福川小

まくは、東日本大しん災のときは田んぼ
 とが畑にフ渡にのみこま来た、がれきがはい
 リンでいる所を見ました。そこからつ波は
 いろいろなものをはかりおるということがわ
 かりました。それでも、今は田んぼや畑に人
 リンだがれきはなくなつたのでまた田んぼ
 や畑がまたつくれるようになったのでよか
 そうです。そこから未来では線路がおつてい
 たり、福島の漁業で魚をとれるようになった
 リンがしてゐる人たちがもとの家にもどれ
 るようになっていきたいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 さしづか 年齢 11 歳 職業・学校名 福岡学校

は	や	く	電	車	は	り	り	た	い										
・	常	磐	線	が	津	波	に	流	さ	れ	て	え	き	と	電	車	も	流	さ
れ	た	。	と	く	も	水	は	し	な	っ	た	で	す						
・	線	路	の	工	事	が	始	ま	っ	て	遠	く	み	ら	て	き	あ	が	
た	線	路	が	見	え	て	ま	た	。	工	事	の	車	や	ダ	ン	ブ	ラ	
ー	が	ひ	っ	さ	り	か	し	に	な	り	て	い	ま	す	。	今	年	中	
に	で	き	あ	が	る	予	定	で	す	。	工	事	の	す	ま	り	さん	さん	
ば	っ	て	く	だ	さ	い													
・	電	車	が	は	し	る	よ	う	に	り	、	み	ら	仙	台	駅	ま	で	り
り	た	い	て	す	。	お	兄	ち	さん	と	い	っ	し	ょ	に	二	番	前	
の	車	り	よ	う	に	の	っ	て	流	れ	る	り	し	さ	を	見	は	い	く
す	。	今	か	ら	楽	し	み	て	す	。	わ	く	わ	く	し	て	い	ま	す

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 村 花 年齢 11 歳 職業・学校名 不明

東日本大震災からの復興への想い

五年 林 彦我

震災から四年がすぎました。

ぼくはそれときは保育所にいきました。お母

ちからあつてまじきゅうしよく望むおわらう

てしたらとあせむ大きなじしんがおきました。

それで多くの人があつきました。とてもかたし

に思いました。自分のあつて居る町があつては

ててしまひました。それをもとにもどすため

にいろいろな人があつてあつていひます。

町があつてとつりになつてうれしいです。

「吉口太夫雲霧からの御願への想い」麻葉田紙

匿名希望

子どもがふみだす、ふくし玉復興体験事業
 業で、9月にがるそばは用平皿を打つ二人の会
 の人としました。初めにとう若の先生が、お
 手本とフツを見せしてくれました。その後、み
 んなで平皿を作りました。先生が作っている
 のを見ている時はかんたんそうに見えたけれ
 ど、いざ作ってみると、力がいるし、フツも
 つかめないし、失敗してしまいました。おは
 ちさんたちと「けっ、こうむずかしね」と話
 しながら何回も作り直しました。
 11月にはそば打ちの先生が来て、手打ちそ
 ばを作りました。そば打ちは技術がいるの
 で私には、できなと思います。ていきました。ちよ
 ゝ、そばがけたそばをしたけれど先生がなおして
 くれて、なんとかが作れました。そして平皿に
 もっておいしく食べました。
 今回お世話になった、ただ二人の会のおはち
 さんたちには、仮設住宅から出ていって会がつか
 いがなくなるけれど、人とのつながりを大変
 にいろいろな体験を通していえたと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 小賀坂 葉雪

年齢 10歳

職業・学校名

福田小学校

2	0	1	1	年	3	月	1	1	日	に	東	日	本	大	震	災	が	起		
こ	っ	た																		
新	地	町	は	、	震	度	6	強	の	ゆ	れ	に	お	そ	ゆ	れ	、	津		
波	が	、	夫	く	十	ん	を	反	、	そ	の	時	私	は	、	よ	う	ち	園	
思	で	、	バ	ス	で	帰	っ	て	い	る	と	中	で	し	た	。	バ	ス	に	
の	っ	て	い	る	と	、	い	ま	ま	で	に	聞	い	た	こ	の	な	い		
音	と	強	い	ゆ	れ	が	起	こ	り	ま	し	た	。	ゆ	れ	が	お	き	ま	
っ	た	後	、	家	に	も	ど	り	と	、	ま	た	地	震	が	起	き	て		
お	じ	い	ち	と	人	が	海	の	ほう	を	見	た	ら	、	「	堤	防	と	危	
て	津	波	が	来	て	る	」	と	い	っ	て	、	急	い	で	に	げ	ま	し	
た	。	コ	ミ	ュ	ニ	テ	ィ	ー	セ	ン	タ	ー	に	災	難	し	ま	し	た	。
す	る	と	、	コ	ミ	ュ	ニ	テ	ィ	ー	セ	ン	タ	ー	の	と	な	り	の	
道	路	ま	で	津	波	が	来	ま	し	た	。	私	は	、	そ	の	後	、	福	
田	小	学	校	の	体	育	館	に	ひ	ろ	し	ま	し	た	。	震	災	の	後	
お	父	さ	ん	に	状	き	よ	う	を	教	え	て	も	ら	る	と	、	私	の	
家	の	と	な	り	に	、	ゆ	れ	き	が	夫	く	十	ん	あ	っ	た	と	ま	
ま	し	た	。	こ	れ	か	ら	の	新	地	町	は	、	す	ご	く	笑	顔		
か	ふ	え	て	、	笑	い	声	が	ひ	び	く	よ	う	な	、	や	さ	し	い	
な	新	地	町	」	に	な	。	て	ほ	し	い	と	思	い	ま	す	。			

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 佐伯 彩花

年齢 12 歳

職業・学校名 新地町福田小学校

わたしは、今住んでいる新地町の漁業が早く復活してほしいです。新地町は、震災が起ころ前までは、漁業が盛んで、特にカレイという魚が有名でした。わたしもよくお母さんや弟といっしょに、つるし浜の漁港に行きました。ことがあります。作業をしているところまで行くと、たこがいないですが、少し遠くから見た魚をとるための船はどこかオーラがありました。それに、わたしのおじいちゃんは魚つりがしゅ味で、よく近くの海で魚をとってまてくれました。わたしがようち園に通っていたころは、休みの日によくおじいちゃんの家に行くと、達と集まっていたのですが、夜は必ずと言って、とてもいいほどおじいちゃんがとってきた魚料理でした。大きな魚をつって、こころ快にさばくおじいちゃんはわたしの目まんでした。

今は、放射線の問題などで漁業が復活することは難しいそうですが、わたしはもう一度あの活気にあふれた漁港を見てみたいのです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

匿名希望

一人災はぼくが小学校1年生の時の出来事
 だ。あれからもう少しして5年になる。
 新地町は津波と原発事故の被害を受けた。
 駅も流されて電車がなくなつた。ほとんどの家の
 前には仮設住宅が出来た。その後トラックが
 重た国道を多く通るようになった。静かにな
 った新地町からともにもどらなくなった。たった
 1日の出来事なのに元に戻るのにには二人はに
 時間がかかるとか、と思った。
 5年経つた今、新地町は復興の真っ最中。
 家の前の仮設住宅の人達が皆引っこしおしと
 取りこわしが始まっている。駅や防波堤が作
 られていく。新しい新地町が出来上がると
 していき、でもここには来ると思ふの言もおく
 が、今は忘れられていく気がする。しか
 し絶対に忘れられない。10年後、100
 年後、1000年後に伝えていかなくければ
 ならない。こんな被害が出ないようにして
 ほしい。そして早く復興して静かに平和な新
 地町にもどってほしい。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 玉野航大

年齢 12 歳

職業・学校名 福田小学校

ぼくは、あの時、福島にはいませんでした。
 けれど、福島に居る、じいちゃんたちが心配
 でした。ぼく
 ぼくは良く、夏休みなど、福島のじいちゃん
 の家に行き、夏の日には、海に行っていました。
 でも、2011年3月11日、東日本大震災
 が起こりました。ぼくは、その映像をテレビ
 でみました。海の近くの家はなにかされ、船は
 どいはなにかされているじょうたいでした。
 ぼくは心配になり、そして、2013年ごろにじい
 ちゃんの家へ家族と行きました。じいちゃん
 はあちゃんは元気だ。けれど、町が海の近くの
 場所、相馬の駅など、200年ごろの福島とちが
 うけしきで、ビックリしました。
 このことから、ぼくは、前の福島の海や、
 町などにもとってほしいと思っております。その
 ために、復興に関することは、積極的に参加
 し、またあの時のように、福島の人々の笑顔あ
 ぶれる福島にしていきたいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 若山 木保人 年齢 11歳 職業・学校名 福田小学校

あ	の	3	・	1	1	か	ら	も	う	す	ぐ	5	年	の	月	日	が	た
ち	ま	す	。	自	分	に	と	っ	て	そ	の	5	年	は	長	い	よ	う
短	か	か	っ	た	様	に	思	え	ま	あ	。	今	で	も	は	。	き	り
憶	に	残	。	て	い	ま	す	。	津	波	も	お	り	ま	た	り	つ	大
な	ゆ	水	が	菜	る	か	分	か	う	な	い	か	ら	車	に	毛	布	や
物	を	つ	人	で	寄	ま	し	た	。	余	し	人	が	何	回	も	つ	づ
き	二	冊	か	っ	た	し	。	津	波	も	お	っ	た	し	。	そ	し	て
父	さ	人	の	車	か	っ	た	な	み	で	流	さ	れ	て	会	社	か	ら
っ	て	二	冊	な	か	っ	た	か	ら	夜	は	あ	じ	く	心	配	が	
た	。	お	父	さ	人	が	帰	っ	て	き	た	の	日	の				
日	方	が	し	た	。	宣	伝	全	員	無	事	で	け	ん	と	う	に	お
っ	た	と	思	い	ま	し	た	。										
東	日	本	大	し	ん	と	い	か	あ	っ	て	新	地	の	活	の	た	
め	に	ひ	き	る	こ	と	を	さ	か	し	て	か	っ	て	い	け	る	と
い	い	と	思	い	ま	し	た	。										
そ	と	し	。	新	地	の	た	め	に	役	に	た	て	ま	し	た	と	
と	か	し	た	い	で	あ	っ	。	そ	の	た	め	に	。	今	免	職	を
し	て	い	ま	し	た	。	で	す	。									

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 若林光輝

年齢 11歳

職業・学校名 福田小学校

ニホは、ぼくたちが1年生のころの出来事だ
 った。
 だか〜という音とともに、ぼくの体は、少し
 うずくまらなにも、でも、おさまてい
 と、おくじの机の外におし出工たえうら
 地震が止み、しばらくしてじいちゃんかあか
 へにきた、朝、登校してまたとまの道とちが
 い、地がまた、アスファルトがくずすといま
 しころがあった。
 え、2、2時46分、黒いカーが、家の前の
 へぼくのまにきて、もとは家だ、たのたう
 か、材木や屋根がねが木、波が引いたころ
 は、この地を知、こころ人とも、分からな
 だら、夜も、ていた。も
 今は、新地町は、とておにぎせかになつた。
 あまり車が通らなかつたのら、今ではトラッ
 クがたたく人通、ていさ。た、た1日の出来
 事なのに、元にもどすまては何年もかか、て
 いる。このことは、して去年より10年後20年
 後30年後、おとこが、おしにたあうら、い。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 林有江 年齢 1 歳 職業・学校名 福島小学校

震災を福島の自分達の町にのみならず、復讐住
 居なくす人がたたく人います。あじは日
 と少しで5年かたとうしてあります。4年も
 たつた今でもいまだに町にのこる人た
 またり、これに、つ波を家族をなくした人もた
 くたしいます。

福島はけつり町（宮城県にも自分の家に帰ら
 ずの人たつ波に、家たつくし人のたし
 たり、おや。

嵐手にて、鉄道の止まった、りし、帰れなくて
 いる人もいます。

今後進むべき未来は自分の町の町に帰って
 行くこと、のたし、未来は。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 渡部友里 年齢 12歳 職業・学校名 福田小学校

わたしは、震災から約5年た、た今、復興
 があじく復興していて、ほ、と安心したりも
 します、ですが、まだ復興がいま届いていな
 い場所もあるのが、これだけ、大きな被害が
 あったのが感じられました、
 今でも、行方不明者が約4人もの人たちが見
 つか、ていないということを知、ていて、悲
 しくなりました。か、こくも、早く見つか、
 てほしいと思います、
 しかし、復興が、あじく進んでいるところ
 もあります。例えば、復興商店街です。津波
 で流された商店街が、復興で商店街をつくっ
 たのは、あじく良いと思います。そのおかげ
 で、落ちこんでしまった人たちも、商店街
 のに助けがて、元気にな、てくれるからで
 す。でも、それが実現しているところは、多
 くはありません。なので、も、と増やしてい
 っ、て、より多くの人たちに元気にな、てもら
 いたいし、地域の人とも、お話がてきるのて
 増えしてほしいです、

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 林 蓮花

年齢 12 歳

職業・学校名 新地町立福田小学校

私	は	東	日	本	大	震	災	で	、	大	き	な	被	害	を	受	け	ま		
し	た	。																		
震	災	後	か	ら	は	、	復	興	に	向	け	て	の	や	る	レ	が	将		
え	べ	祭	り	を	開	か	れ	て	い	ま	す	。	し	か	し	、	今	の	新	
地	町	で	は	イ	ベ	ン	ト	加	少	な	い	と	思	い	ま	す	。	町	の	
大	き	な	イ	ベ	ン	ト	と	レ	て	は	、	や	る	レ	が	将	え	べ	祭	
り	、	産	業	祭	り	の	た	っ	た	2	つ	レ	が	あ	り	ま	せ	ん	。	
私	は	そ	こ	を	考	え	ま	し	た	。	イ	ベ	ン	ト	を	も	と			
や	れ	ば	い	い	と	思	い	ま	す	。	理	由	は	、	そ	の	イ	ベ	ン	
ト	を	や	れ	ば	、	地	域	の	人	々	は	笑	顔	で	あ	ら	ぬ	る	か	
ら	ず	。																		
私	は	こ	の	よ	う	な	こ	と	を	考	え	た	の	で	、	イ	ベ	ン		
ト	と	し	か	を	作	る	こ	と	は	お	き	な	い	の	で	、	前	が	、	た
プ	レ	ゼ	ン	テ	ー	シ	ョ	ン	を	も	と	に	そ	れ	を	将	来	で	き	
る	よ	う	に	な	る	レ	イ	ベ	ン	ト	も	今	お	り	も	増	え	、	笑	
顔	が	い	っ	ぱ	い	出	る	と	思	う	の	で	、	今	は	何	も	お	き	
ま	せ	ん	が	、	た	だ	し	つ	、	そ	の	こ	と	を	お	き	る	に	は	
勉	強	が	必	要	だ	の	お	ん	を	か	ん	ば	、	こ	の	地	域	の		
お	ん	が	笑	顔	で	あ	ら	ぬ	る	よ	う	な	町	に	し	て	い	ま		
す	。																			

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 林 香花

年齢 12 歳

職業・学校名 福田小学校

私	達	新	地	町	で	は	津	波	の	害	が	と	て	も	大	き		
か	っ	た																
去	年	ま	で	は	仮	設	住	宅	に	多	勢	の	人	が	住	ん	で	い
た																		
で	も	今	は	ち	が	う												
町	の	あ	ち	こ	ち	に	新	し	い									
家	が	連	な	っ	て	い	る											
新	し	い	住	宅	や	ア	パ	ー	ト	も								
建	っ	て	い	て														
そ	こ	の	ち	っ	う	車	場	に	は	車	も	い						
ば	い	と	ま	っ	て	い	る											
仮	設	住	宅	は	と	り	こ	わ	し	に								
な	っ	て	い	る	よ	こ	も	あ	り									
み	ん	な	復	興	に	向												
け	て																	
か	ん	は	っ	て	い	る	ん	だ	な	あ	り	思	う					
総	合	体	育	館	の	近	く	に	あ	る	仮	設	住	宅	は		そ	こ
は	元	は	運	動	競	技	場	だ	っ	た								
震	災	前	で	は	総	合												
公	園	運	動	競	技	場	、	総	合	体	育	館	で	遊	ん	だ	り	
ス	ポ	ー	ツ	を	し	た	り	す	る	人	が	多	か	っ	た	の	に	震
災	後	に	な	る	と	総	合	公	園	で	は	休	日	も	誰	も	遊	ん
で	る	人	が	い	な	く	総	合	体	育	館	で	は	ス	ポ	ー	ツ	
少	年	団	で	使	う	く	ら	い	に	な	っ	て	し	ま	っ	た		
私	は	ま	た	み	ん	な	と	い	っ	ば	い	遊	ん	で	ふ	れ		
合	え	る	よ	う	な	場	所	を	作	り	た	い	と	思	っ	て	い	る
震	災	前	の	新	地	町	の	よ	う	に	み	ん	な	と	ふ	れ	合	
て	震	災	前	以	上	に	元	気	な	町	に	し	た	い				

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 藤田 優花 年齢 12歳 職業・学校名 福田小学校

わ	た	し	は	、	東	日	本	大	し	ん	災	か	あ	っ	た	こ	ろ	は		
2	年	生	の	こ	ろ	で	し	た	。											
東	日	本	大	し	ん	災	を	受	け	て	、	と	っ	て	も	悲	し	い	思	
い	を	し	ま	し	た	。														
で	も	、	今	は	東	日	本	大	し	ん	災	か	ら	の	復	興	が	あ	る	
の	で	今	は	安	心	で	す	。												
で	も	、	東	日	本	大	し	ん	災	の	こ	と	を	思	い	出	す	と	、	
と	っ	て	も	悲	し	い	と	思	い	ま	す	。								
で	も	、	悲	し	い	の	は	わ	た	し	た	け	が	た	な	い	ん	だ	。	
と	い	っ	て	も	思	い	ま	す	。											
で	も	、	も	う	あ	ん	な	思	い	を	し	た	く	な	い	で	す	。		
わ	た	し	は	、	東	日	本	大	し	ん	災	を	2	度	と	お	こ	ら	な	
い	で	ほ	し	い	で	す	。													
わ	た	し	は	、	東	日	本	大	し	ん	災	か	ら	の	復	興	を	と	っ	
て	い	て	、	今	は	と	っ	て	も	幸	せ	た	な	あ	。	と	思	い	ま	
す	。																			
で	も	、	東	日	本	大	し	ん	災	を	起	こ	ま	て	、	と	っ	て	も	い
っ	ク	リ	し	ま	し	た	。													
で	も	、	も	う	東	日	本	大	し	ん	災	が	起	こ	ら	な	い	よ	う	
に	な	っ	て	ほ	し	い	で	す	。											

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 森 奈津美 年齢 11 歳 職業・学校名 福田小学校

震	災	か	ら	4	年	10	ヶ	月	が	過	き	、	あ	の	時	自	分	は		
一	年	生	の	終	わ	り	ご	ろ	で	し	た	。	震	災	の	時	は	、	友	
達	の	お	母	さ	ん	に	学	校	に	お	か	え	に	来	て	も	ど	い	、	
お	兄	ち	や	ん	と	帰	り	ま	し	た	。	ひ	な	ん	場	の	コ	ミュ		
ニ	テ	ィ	ー	セ	ン	ワ	ー	か	ら	見	た	、	津	波	の	風	景	は	と	
て	も	不	空	で	い	た	の	を	賞	え	て	い	ま	す	。	そ	の	後	、	
福	田	小	学	校	に	ひ	な	ん	し	、	家	族	に	会	い	ま	し	た	。	
家	族	に	会	っ	た	時	は	涙	が	出	ま	し	た	。	そ	の	日	の	夜	
は	、	数	の	涙	め	ら	れ	た	お	に	キ	リ	を	食	べ	ま	し	た	。	
そ	し	て	、	何	分	か	た	っ	と	ほ	く	か	よ	っ	て	い	た	と	ん	
カ	ッ	家	さ	ん	の	人	が	カ	ッ	を	お	弁	当	に	入	れ	て	ま	り	
く	水	ま	し	た	。	あ	の	時	の	味	は	今	で	も	忘	れ	ま	せ	ん	
食	べ	物	の	大	切	さ	が	た	と	て	も	分	か	り	ま	し	た	。	い	っ
ま	は	、	あ	ん	ま	り	食	べ	物	の	大	切	さ	な	ど	感	じ	た	り	
す	る	こ	と	が	な	か	っ	た	け	ど	、	震	災	の	時	は	と	て	も	
感	じ	る	こ	と	が	で	き	ま	し	た	。	震	災	後	は	、	自	分	の	
家	に	帰	る	こ	と	が	で	き	ま	し	た	が	、	今	だ	に	帰	れ	て	
な	い	人	が	い	る	か	ら	、	今	後	私	は	、	復	興	に	向	け	て	
自	分	に	出	来	る	事	を	少	し	ず	っ	深	し	て	か	っ	て	い	き	
た	い	と	思	い	ま	す	！													

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 栢い正崇

年齢 12 歳

職業・学校名 緑田小学校

ぼくが、東日本大震災を経験したの年、七
歳のときでした。今でもよく覚えています。
津波は見てはいませんが津波の後の風景を見
るとてもショックが、おのれを道迷せしめず。
それに、おばあさんとおばあさん、とこ屋の
おばあさん、たくさんいる人から、
なりました。おばあさんとおばあさん、
した。風景は、変わってしまいましたが少し
ずつ、建物が増えています。もとの通りには
なるといけど、たくさんと復興していること
で僕も少しづつがんばろうと思いました。福
島県は原発の復興もしなければ、なりませんが
ぼくに何かできるのか、今はよく分かりませんが
が、立ち直ろうという気持ちをもったから生
活するのが大事だと思います。亡くな、
た人の分まで、精一、は、生きてると、東日
本大震災での出来事も未来に伝えたいと思
います。そして100歳まで生きていきたいと思
います。

氏名 只野 心 年齢 11 歳 職業・学校名 馬ヶ嶺小学校

東日本大震災から復興への想い
私がほいくしよのときに東日本大震災がお
こりました。私の家やおばあちゃんの家はぶ
じでした。私のおばあちゃんの家では、電気
は止まってしまいました。水は出てきたの
でだいじょうぶでした。でも水はつめたい物
しか出なかつたのでおんせんに行きました。
けしきを見ているとお母さんが、
「海が、はつきりみえるね。」
と言いました。前までは、海は少ししか見え
なかつたけど、今は見えると思うと少し不安
になりました。津波が、またきたらどうなる
のかと思ってしまうからです。
だから、どんぐりの木を植えたり、まだ自
分たちの野に帰れない人たちにいろいろな協
力をしたりなどした方がいいと思いました。
復興への想いは、私たちみたいに帰れな
かた人、家族がひさいした人たちに元気が出
るようにいろいろな楽しみや笑顔をうくれる
野にしたいことが想いです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 木村 裕之 年齢 49 歳 職業・学校名 教員 新地町立野瀬小学校

間もなく震災から5年の節目を迎える。3機のがれき処理プラントはその役目を終えて解体され、応急仮設住宅から復興住宅への転居がひと段落し、高速道路や鉄道などのインフラ復旧・整備が急ピッチで行われている。ハード面での復興は着実に進んでいる。そんな中、娘が先日行われた成人式に無事に参加できた。彼女たち世代にとって3.11は、中学校卒業のまさにその日であった。5年ぶりに集い、互いの近況を確かめ合うのと同様に、5年前の震災のこと・震災を機に変えざるをえなかった将来の進捗状況などが話題になったそう。今後も顔を会わせるたびに行われていくに違いない。福島の子として、娘はもとより、全ての福島の子どもたちの幸せと夢の実現を願わずにはいられない。教員である私は、目の前の子どもたちに、福島の子として生まれたことに誇りをもって生きていくことができるよう、日々の教育活動に励んでいかなければならないと気持ちを新たにした。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 宮島 げん

年齢 11 歳

職業・学校名 新地小学校

五年前の三月十一日に、東日本大震災がおこ
 りました。私は、まだ一年生で小さかったの
 どもとても怖い思いをしたのを今でも覚えてい
 ます。家は、海の近くにあったので津波で流
 されてなくなりました。その日は、家もなく
 なったので帰れないので母の職場に泊まりま
 した。それから避難所や、この家にお世話
 になりました。仮設住宅が出来てからは、そ
 こで四年三ヶ月を過ごしました。震災後全国
 の方々から沢山の支援を頂きました。とても
 感謝しています。今は、新しい家に引っ越し
 て毎日楽しく暮らしています。震災を経験し
 て人と人とのつながりを感じて、助け合う事
 の大切さを学びました。お世話になった沢山
 の方々に恩返し出来る様な大人になろうと思
 っています。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 脇坂 大輝 年齢 12歳 職業・学校名 新地小学校

ぼくは、震災当時、福島県南相馬市の小高
 区というところにある学校へ通っていました。
 友達と遊んでいるときにとつぜん、大きな
 ゆ水を感じたかと思うと、しだいに大きくな
 り、10分後に津波が来るぞ、というこもお
 母さんから言われ、学校からは、家に逃げ
 に行ったときには遅らくも下さ、というこ
 とを言われましたが、家はすでにけかりのよ
 うな波にのみこまれていました。当時まだた
 のたのたの泳ぎがしたか、津波の来るのはまだお
 ぼろとおぼえていて、これからはびにすま
 のてをど、たまぎまを疑問が頭にうかんだの
 が今でもほっきりとおぼえています。
 今、あの東日本大震災のことをふり返り、
 思いだすと、学校、及び体育館での震災直後
 の生活は、福島県外の方々にもお世話になり、
 ぼくたちの知っている身近な人がいっしょう
 けんめい食を配ってくれたことが、今、国々
 たちが生きていけることはなにかと思ひます。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 寺島 穂紗

年齢 12 歳

職業・学校名 新地小

私は、東日本大震災で、悲しい事もたくさんありました。

まず、放射せん量のえいきょうで校庭が使えなくなりました。校庭が使えなくなると、たのしみは、悲しいです。

次に、悲しいのは、新地に住めなくなりました。お父さんとお母さんとは母れは母れになつたことです。理由は放射せんのえいきょうで、おじいちゃんとおばあちゃんも妹と私で仙台に向かいました。そしてお父さんとお母さんは仕事のため新地に残りました。

私は、このように悲しい事は町の人がみんな力を合わせ、新地町が復興したので今私は、元気に新地小の校庭で遊び、自然豊かに新地町に住んでいるのだと思います。そして、復興に力を貸してください。たのみなことに感謝の気持ちでい、はいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 寺島 習己 年齢 12 歳 職業・学校名 新地小学校

ぼくが、東日本大震災で住んでこいた家は、
 祖父が亡くし壊された。
 私が一年生だった時、父はなにかお世帯の方
 をかりませんでした。母が泣いてる姿が
 田にやきつってます。その後、蘭、相馬市の親
 せきの家、群馬の親せきの家、埼玉の親せきの
 家へお世話になりました。おこしに飯を食
 べかせてもらったり、夜寝させてもらったり
 して、親せきのみなさんに話して感謝してこ
 ます。新地町に来てからは自衛隊のお方や他
 県からのボランティアの方々が、お世話を
 してくれて、お世話になっておありかったです。
 す。
 ぼくが住んでるお家の周りには、お世帯の
 何か出来ることをしてあげたいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 加藤 誠夫

年齢 12 歳

職業・学校名 新地小

東日本大震災が起きたとき、ぼくは小学
 一年生でした。大津波警報が流れ、おばあ
 さんと大急ぎで中学校に避難しました。家族全
 員の無事が確認できたのは、その日の夜でし
 ました。避難した人達の中には、家が流れたり
 家族の命を失った人もいました。とても悲し
 みに出来事でした。
 あの日からもうすぐ五年が経ちます。新地
 町では、津波でこわされてしまっただ道路や線
 路を元にもどす工事が進んでいます。自衛隊
 の人々やボランティアのみなさんの協力をも
 らい、少しずつみなが前へ進みだしていま
 す。けれど、復興が進むにつれて、ぼくたち
 の震災の記憶がうすれつつあります。ぼく
 に出来ることは、この大地しんの体験を忘れ
 ず、自分の子どもに語り継いでいくことです。
 そうすることで、新地町に大まな被害があ
 った事を未来に伝えたいです。一人一人がこの
 記憶を忘れず、地しんに対する備えをするこ
 とが復興のためには、大切だと思っています。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 渡部 綾菜 年齢 12 歳 職業・学校名 新地小学校

東日本大震災からもうすぐ5年がたちます。
 あのところは、外遊びや、登校班などできません
 でした。学校に行っても、校庭で休遊ん
 だりはできず、教室の中で静かにしているこ
 としかできませんでした。でも、震災から5
 年がたると今は、外遊びや登校班など校庭で
 遊ぶこともできるようになりました。また、
 震災前のような生活にもどることができまし
 た。でも、まだ復興していないところもあり
 ます。今、新地町の駅も作っているところ
 です。道路や家も作っているところもありま
 す。町は、今復興の途中ですが、学校は今まで通
 りに勉強、運動ができています。早く町全体
 が復興してほしいと思っています。それに、
 駅も早く完成して電車にも乗ってみたいと思
 っています。町全体が、安全な町になつてほ
 しいです。それから、海も震災前のきれいな
 海にもどってほしいです。そして、きれいな
 海に入りたいと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 新妻 悠未 年齢 11 歳 職業・学校名 新地小学校

私が、東日本大震災からの復興で思った事
 、教わった事は、人の優しさです。
 3月11日私はまだ1年生で、地震がおきた
 時は、何がなんだか分からなか、たけれど
 その時にお世話になつたパティオというお括
 の人から人の優しさを教わりました。3月11
 日、私たち家族の大切な家がいっしょんで黒
 い波にのみこまれたのをまだ目に焼きついて
 います。私はその時、悔しかったです。私の
 大切な思い出が切れた家を私はなににも出来
 ずにいっしょんで黒い波にのみこまれ、すば
 やくも、こいからて悔しかったです。
 そして私たち家族は、おはあちゃんの家に
 行くことにしました。そのと中、弟が何かの
 機たいと言ひ、パティオという店の前にあつ
 た自動販売機でジュースを買つた。こいたら、あ
 店から店員さんが出てきて「お腹空いたでしよ
 う。キーをくくれました。その人の事を未だ
 に覚えています。私は、人の優しさをとても
 大切な事として思い出したと感じました。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 菅野 沙也香 年齢 12歳 職業・学校名 新地小学校

東日本大震災からもうすぐ5年がたとうと
 しています。あの日から、私はたくさんの人
 に感謝しています。

避難所に行つて不安なときにみんなに少し
 ずつ食べ物をくれたことだけでも私はとても
 心があたたかくなりました。

震災から少しずつ復興してきている今でも
 様々な人達が支えてくれて 있습니다。私は、た
 くさんの人のあたたかい気持ちをし、かりと
 受け取り、返していくことが大切だと考えて
 います。

震災直後はしばらく教室で勉強することが
 できませんでした。あのときはいつから学校
 でみんなと授業を受けられるのかと心配でし
 た。でも今は私達が安心して勉強に取り組め
 る環境を整えてくれて います。

そのことに感謝して私は一生懸命勉強し、
 教師になるという夢を叶えたいです。そして、
 震災を経験して、ない子ども達にみんなが勉
 強できるありがたさを伝えていきたいと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 布施 浩

年齢 12 歳

職業・学校名 新地小学校

私は震災の時、感じたことの無い恐怖にお
 そお来まじた。とっ前大きく地面がゆれ、テ
 ーブルの上にあったノートやパソコンがは
 いき飛ばさぬでしまつとにかく周りはいた夫
 のまねをしようと、うごで頭をおおかくし
 ました。

その後、家族とぶい再会出来ましたが、ひ
 難所をや、て来たこの一スを見て、急にショ
 ックになりました。よく行、た相馬の海があ
 ら、ついに福島に留まることさえ放射能は
 より難しくなりました。

たやらと夏になり、前の家、もどりました。
 でもやはり、あつたことは事実であり、もう
 今を愛えることはもちろん無理です。同じ福
 島でありながら立ち入り禁止の所もあり、魚
 も野菜も他県の物の口にするのが多くなりま
 した。

私はこの東日本大震災をきくのこのことによ
 うにし、かり覚えて、います。このことを忘れ
 ず自然の力を、と胸に焼きつけて、います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 早川 結希

年齢 11 歳

職業・学校名 新地小学校

私は、今の状態は、復興ではなく、まだ、復旧だと思えます。

理由は、震災や、原子力発電所の事故で、たくさんの方が亡くなりました。その亡くなった人が、みんな帰ってきて、震災前以上の活気を取りもどすことこそが、復興だと思っからです。

今はまだ、元通りの生活ができるようにするための工事が多いと思えます。そのおかげで、亡くなった人が少しずつ帰ってきて、活気も取りもどしつつあります。ですが、このままでは震災前と同じくらいの活気で終わってしまいます。復興は、それ以上の活気を取りもどすことなので、元通りの生活と、みんなが幸せに暮らせる何かが必要です。

これからは、復旧の工事に加え、復興の工事も進めていき、町に活気があふれ、みんなが幸せに暮らせる町づくりをすることが、今後進むべき未来だと、私は考えます。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 渡部 瑛士

年齢 12 歳

職業・学校名

新地小学校

ぼくの家は、東日本大震災の津波で、家を
失いました。

今、現在は、福島県新地町のかんご屋仮設
住宅で生活しています。学校は、新地小学校
に転校して、始めは友達が少ないけれど、
野球部に入ると友達がたくさん増えました。
平日は、火曜日、木曜日、週末は土曜日、日
曜日にいっしょにうけんめい練習をかんが
います。

今、新しい家を新地町に建てています。予
定では、五月から六月ぐらいに、完成するみ
たいです。今からしても楽しみです。

今年の春に、中学校に入学します。中学校
に入ったら、野球部に入りたいと思います。
できれば、高校でも野球をやりたいと思っ
ています。

この震災で、家がなくなったり、原発の放
射能でびびる人したり、今までの友達とはなれ
たり大変な思いをしたけれど、この新地町で
勉強や部活をかんがっていきたいと思いま

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 菅野 竜雅 年齢 12歳 職業・学校名 新地小学校

震災から約4年ほど月日が流れ、町は復興
 へと向、ているのがわかります。それでも、
 今の新地町には足りないものがたくさんあり
 ます。豊かな緑など、昔はここを眺めた
 時は、当り前のように木がたくさんありまし
 たが、今は、もともと木のあつた場所は、何
 にも成り砂に変、ています。その他に足り
 ないものは、きれいな海です。夏はいろんな
 家族が泳いでいたのに、誰もこなくなり、魚
 だつて、危なくて、食べられません。だから、
 ぼくは、昔の新地町になつてほしいと思いま
 す。都会のように賑わなくともいいから、昔の
 ような、緑が豊かで、海がきれいな、自然豊
 かな町になつてほしいです。そして新地町を
 けいはなく、日本全体が、自然あふれる、
 美しい日本になつてほしいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 鴨原 海風 年齢 11 歳 職業・学校名 新地小学校

東の大震災からもうすぐ五年が経ちます。
 僕はその日、家族や近所の人と祖母の家の庭
 において津波にのみまれました。妹と祖母、近所
 の人たちが亡くなり、僕は助かりました。
 当時はとても大変だったし、今でも考える
 たびに辛いや悲しいです。悔しいになります。
 でも僕は、どんなに大変なことが起きても命
 がある限り一生懸命生きていかなければなら
 ないことを知りました。そして、自分の命も
 他人の命も大切にしたいと強く思いました。
 福島県は今、復興に向けて頑張っています。
 新地町もどんどん変化しているのが分かります。
 未来がどうなるか楽しみです。
 僕は復興する中で、今生まれている人の願いと
 一緒に犠牲になった人達の想いをし、かり受
 け継いで欲しいと思います。そして、思
 いやりが助け合いの気持ちを持って家族や友
 達を大切に、見た目だけでなく中身もまね
 けて、元気があせがいの、悔しいな福島県になる
 といひたいと思、ていひます。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 黒沢 結文

年齢 11 歳

職業・学校名 新地(む)小学校

今から五年前の三月十一日、僕が生誕地
 だった新地町を、あの大地震、そしてあの
 大津波がおそいきました。震災前の町は、緑豊
 かで青い海が広がって、地域の人口の重
 要なアークセメントを造っていた三菱化成の
 新地駅では、高校生や通勤者などでにぎわっ
 ているのを覚えております。そんな新地町は
 今では土だけの場所ばかりで、海水浴場や漁
 港があり、大釣師浜も、家も店も船も木も、何
 もなくなってしまうことになりました。
 僕は、僕の家もすぐ近くまで津波が来ま
 した。なので、僕の家近所にはほとんど友
 達が住んでいません。僕は、新地町の復興が
 進んで欲しいと思っています。子供も、おじ
 ちゃんも、皆が元気で笑顔あふれる町で
 いて欲しいのです。公園やお店など、震災前
 まりももつとに思い出のある町に生まれか
 り、僕の家もあつたにもたたくたの家が住
 んで、新地町が大船場になる人があつても
 欲しいと思っています。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 小野 潤太 年齢 12 歳 職業・学校名 新地小学校

ぼくの住む町、新地町は、東日本大震災か
 が今年の3月で5年たとうとしています。震
 災直後には、道路や住まい、駅周辺など
 で復旧復興が進んでいます。例えば新地町と
 通るJR常磐線は平成29年、春の再開通を
 目指し復旧作業が進んでいます。また、住ま
 いでは、高台への住まいの再建が進んでおり、
 町内で合計7団地あり、ぼくの家付近には、
 最も大きいかんご屋団地があります。すでに
 多くの人々が移転しています。その他に、災
 害公営住宅の整備も進んでおり駅周辺にも、
 建設される予定です。

ぼくが描く未来の新地町は、自然に囲まれ
 ていて、人々が集まり活気のある町です。そ
 のために、町の中心部にスクエアでも遊ばせ
 も何でもできる大きな広場を作り人を呼ぶ
 よせ、活気の良き町になるよう復興が進めば
 いいと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 高藤 悠也

年齢 11 歳

職業・学校名

新地小学校

ぼくは、東日本大震災が発生した時には、
原町の原町第一小学校にいました。その時は
大きなゆれに、とてもびびりし、外に逃げ
だしました。

次の日に原町からひなにし、新地の おば
あちゃんの家で、ずっと過ごしています。そ
のため、新地小学校へ転校しました。そこで
は、始めは、上手く慣れなかつたけれども、
今ではすっかりなじんでいます。特に、三年
生から野球部に入り友達がたくさんできまし
た。学校でも野球でもいろんな人が、支援を
してくれました。一番心に残っているのは、
元、D&N Aベイスターズの高藤勇旗選手が
きました。あきらめないでがんばれといわれ
てうれしかったです。これからは、応援して
くれた人たちのことを思い出して、それが困
っている人がいた力になりたいと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 木村 夏幸

年齢 12 歳

職業・学校名 新地小学校

あのとおそろしかった東日本大しん災から、
 六年の月日が過ぎようとしていきます。ぼくは
 おかえに集てくれたおじいちゃん、児童館
 の駐軍で地しんに合いました。少しゆれが
 おさまってから、急いで家に戻りました。戻
 ると中ぐへいがかたおれていたり、道路にひび
 が入っていたりしました。家に帰ると、かわ
 らの一部が落ちていました。家の中では、皿
 や物が、落ちていました。少したってから外
 に出ると、黒い大きな波が、松の木をのみこ
 んでいく様子が見え、高台に避難しました。
 今では、津波で家も無くした人達の住宅地
 が、ぼくの家も周りにもたくさ人建ち、しん
 災前と比べると全然風景が変わりました。
 ひびが入った道路も直されなくなり、
 しん災前は、検査無しでも安全においしく
 食べれていた魚や野菜などが、今は、何も
 検査をせがには、食べれません。早く放射能
 を気にせず暮らせる生活を送れるようにな
 って欲しいです。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 寺島 大智 年齢 12歳 職業・学校名 新地小学校

ほくは、東日本大震災で、浜の方に、た家を
をなくしました。今、その家は、草が長くは
えていて、まだ少しがら入りの家のかえまが
、あります。

今、住んでいる家は、新しくとても華せに
くがしてあります。

震災から五年かた。こ、防波堤の工事も進
んで来て、新地町全体もいろいろな機械を取
り入れて、進化していると思います。これが
海のほうも、し、かり工事して新地町全体
をも、とも、とか、まづかせてより安全にす
めようにな、てほしいと思います。

学校では、ひなん訓練を年に3回ほど行っ
てあります。でも、あまり上まひなんしなく
てもいいようなとても安全な新地町を自分た
ちで作りに上げていけたらいいなと思、ます。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 日里陽都 年齢 12歳 職業・学校名 新地小学校

震	災	か	あ	、	た	の	は	、	ほ	く	か	1	年	生	の	こ	ろ	だ	
、	た	の	で	、	何	か	起	こ	、	た	の	か	、	あ	ま	り	理	解	で
き	て	ま	せ	ん	で	し	た	。	な	の	で	、	支	援	物	資	か	ど	に
あ	ま	り	感	謝	し	て	い	な	か	、	た	の	か	と	思	い	ま	す	。
で	も	今	、	思	う	と	色	々	と	お	世	話	に	か	、	て	い	た	の
で	あ	り	か	た	い	な	と	思	い	ま	し	た	。	か	れ	き	の	撤	去
が	、	仮	設	住	宅	を	建	設	し	た	り	、	色	々	な	場	所	か	ら
た	く	さ	ん	の	人	が	来	て	く	れ	た	の	で	、	あ	、	と	い	う
間	に	ち	や	ん	と	暮	ら	せ	る	よ	う	に	な	り	ま	し	た	。	前
は	か	れ	き	や	、	ご	み	た	ら	け	た	、	た	の	か	今	は	だ	い
い	減	。	そ	き	て	い	る	な	と	思	い	ま	し	た	。	色	々	な	所
に	仮	設	住	宅	を	造	、	て	い	た	だ	き	、	家	を	流	さ	れ	て
し	ま	、	た	人	も	ち	や	ん	と	暮	ら	せ	て	い	る	な	と	思	い
ま	す	。	ま	が	完	全	に	復	興	で	き	た	お	け	で	は	な	い	の
で	み	ん	な	と	協	力	し	な	か	ら	元	の	新	地	町	に	も	ど	せ
る	よ	う	に	か	ん	が	い	り	た	い	で	す							

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 大谷 大翔年齢 12 歳職業・学校名 新地小学校

ぼくは今、ふつうに食事ができる事を幸せに思っています。

東日本大震災発生時、支援物資などで助けられましたか、なかたにお申し、はいは、食べませんでした。そのとき支援物資がをくばって下さる方がおすごうだと、今も感謝しています。ボランティア活動は、いろいろな人が入るからだと思います。

今から来ると東日本大震災前以上にきれいな町に、えがおの明るい町になっていけばいいなと、思っています。起こってしまった東日本大震災を忘れず未来の人たちに行なってもらいたいです。